＝＝＝

再びじゅうねんの作付けに取り組もうとしている。

浪江町は2017年3月末日に帰還困難区域を除き避難指示が解除されたが。2017年7月末現在で町に帰還した人は152人で（2011年3月11日現在の住民登録人口2万1434人）、大半の住民は福島市や郡山市、いわき市といった避難先での生活を続けている。県外居住者も6318人にのぼり、広域避難の状況は変わってない。被災者の多くはすでに避難先に生活の拠点を移しており、避難指示が解除されたとしてもすぐに故郷に戻れるわけではなく、また、除染やインフラ整備も不十分なままでの帰還政策に対し不安をもつ住民は数多い。帰還意向調査によれば、「すぐに・いずれ戻りたい」と回答した住民（全体の17.5%）は中高年世代が中心で、30歳代以下の住民の7割は「戻らないと決めている」と回答している。また、将来「浪江町で農業を営みたい」と回答した農業者は10.3%にとどまり、「浪江町でもう農業はしない」（42.7%）、「判断がつかない」（42.4%）が多くを占めている。除染後の農地については、行政区単位で組織された復興組合が草刈りなどの保全管理活動を実施しているが、帰還困難区域への立ち入り禁止のバリケードが建ち並び、除染で剥ぎ取った表土入りのフレコンバックがかつての優良農地に山積みされた状況をみると、被災地での本格的な営農再開までにはまだ相当の時間を要すると言わざるを得ない。

このようななか、石井さんは、2016年に浪江町内の除染済みの農地を20a 借り入れ、じゅうねん栽培を開始した。2017年度にはさらに50a を借入し、企業組合の仲間らとともに避難先から浪江町に通って作業をしている。かつて「一人一畝歩運動」を取り組んでいたとき、最も積極的にかかわり、じゅうねんをきれいにつくってくれた老人クラブのお年寄りだった。そしていま、避難指示が解除されても地元に戻るのが高齢者だけならば、かつてのように高齢者が元気にかかわれるじゅうねん栽培に再び取り組みたいという思いからである。

石井さんは、避難先で浪江町民と会うと「もう浪江の話はしたくない」と言われることがあるという。「あのときの恐怖がよみがえるから思い出したくないんでしょうね。後になって、放射能がとても高かったことがテレビや新聞でわかり、自分たちは見捨てられた、あれは何だったんだ、という恐怖と怒り」が、いまでも住民に根強く存在している。だからこそ石井さんは、バラバラになった浪江町民を「食」を通してつなぐ取り組みをしていきたいという。

「最初からあきらめてしまうのではなく、何を食べたいか、何を家族に食べさせたいか、ってところからまず考えようって、皆と話しているのよ。自分がやりたいことは、浪江での暮らしを取り戻したいだけ。お店に行って産地がどこかわからないもの、放射能検査しているのかもわからないようなものを買うのではなくて、毎日汗水流して、旬のものを自分でつくっておいしく食べたい。何よりも、浪江のお年寄りに身体にいいものを食べてもらって健康になってほしいから。」

浪江町農業委員でもある石井さんは、原発事故により失ってしまった地域の伝統食を次世代につなごうと、「浪江町の郷土料理を愛する会」を仲間とともに立ち上げ、浪江の農家が「こじはん」（おやつ）として食べていた「かぼちゃまんじゅう」の調理講習を中学校で行うほか、「浪江まち物語伝え隊」を結成し、3.11後体験した被災地の現実を紙芝居で伝えようと全国を歩いている。

このような活動へと彼女を突き動かしているのは、「福島のいまを発信したい」という強い思いである。避難指示の解除は賠償および避難者支援の打ち切りを意味するが、帰還後の高齢者の生活サポートや長期化する避難生活の支援など取り組むべき課題はいま以上に拡大していく。まるで大震災も原発事故もなかったかのように原発の再稼働が進められるなかで、それでも「なかっ

たことにはしたくない」という彼女たちの声は、あれだけの大事故を経験しても性懲りもなく以前と同じ道を突き進もうとする日本社会へのメッセージでもある。

そして、こうした女性たちからのメッセージに呼応するように、実際に福島を訪れ、福島の復興にかかわり、ひいては福島での定住を目指す女性移住者の姿もあちらこちらにみられるようになった。有機農業や特産品づくり、古民家再生、観光ツアーなどさまざまな地域おこしにかかわる彼女たちに共通するのは、食とエネルギーへの強い問題意識である。3.11後、なぜ彼女たちは、仕事や暮らしの場として福島をあえて選んだのか、3名の事例を以下で紹介したい。

◇◇◇

★　原発事故に伴ない被災した営農活動の再生を聞けて、積極的な行政側（村）の取り組みの姿が良くわかりました。(K.F)

★　論理的かつデータに基づいた、非常にわかりやすい話でした。飯舘村に興味・関心があったので、今回のセミナーに参加できて良かった、このようなテーマの講演を聞くのは始めてであったが、杉岡さんが将来をよく見すえてポジティブに捉えていることが、何よりも嬉しいこと。（J.K)

★　農家の方が、原発事故さえなかったらと書き置きをして亡くなったのを思い出しますが、絶望しない方はすばらしいと思います。飯舘村は3.11以前には畜産の循環型農業だったと聞きましたが、方向転換していると思いました。60歳～70歳台の人ががんばって、農業再開していることが、さしあたっては明るい話題と思いますが、今後もっと若い世代が引き継がないと村の存続が厳しいですね。平成32年度で復興創生期間が終わるとされているとのこと、その間にうまくいけば良いのですが・・。(S.S)

★　営農再開に向けての、並々ならぬご努力とそれを受けての村民の方々の、前向きな気持ちや「飯舘村　営農再開ビジョン」パンフレットに記された言葉に、大いに感銘を受けました。(S.S)

★　人間と原発は決して共存できないことを、改めて感じました。(M.S)

◆◆◆◆【会場カンパありがとうございました】◆◆◆◆

第135回ふくしま復興支援フォーラム(9月8日)の会場で、カンパ8,900 円をお寄せいただき、ありがとうございました。ご報告とともに、御礼申し上げます。（今野）

【会計報告】（2018.9.25現在）

第1期（～2015.9）累計　　収入214,746円　　支出207,640円　残（繰越）7,106円

第2期（2016.10.27～）

「収入」	(2018.8.22までの累計)	151,443円	（第1期　繰越　7,106円含む）
	会場カンパ(2018.9.8)	8,900円	
	計	160,343円	
「支出」	(2018.8.8まで累計)	115,280円	
	計	115,280円	
「残金（現在高)」	2018.9.25	45,063円	

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

＜予告＞

第137回（2018年10月10日（水）　18時30分～20時30分

テーマ　「課題先進地における住民主体の取り組み」

報告者　菅波香織氏（未来会議事務局長)、平山勉氏（双葉未来会議代表）

会　場　福島市アクティブシニアセンター「ＡＯＺ（アオウゼ)」

大活動室１　ＭＡＸふくしま４Ｆ（福島市曾根田町1－18)